

書評 (文献紹介)

作業の研究

Polatajko, H.J. (2000). The study of occupation. In Townsend EA & Christiansen CH, (Eds.) Introduction to Occupation: the Art and Science of Living 2nd ed. Upper Saddle River, NJ, Pearson, pp.57-79.

タウンゼント (カナダ) とクリスチャンセン (アメリカ) が編集する作業入門書の第2版の第3章を、ポラタイコ (カナダ) が「作業の研究」というタイトルで書いている。この文献は、世界作業療法士連盟の作業科学の声明書 (本誌 pp.94-95) にも引用されている。

著者は、作業についての学び方を学ぶために、本章を書いたと述べている。私たちは毎日数多くの作業をしているし、出版物やテレビで描かれている作業を見ている。しかし、作業を理解することは簡単ではない。作業を理解するために、何を知らなければならないのか。

まず、知識や真実をどんなものだととらえるのかについて、Perry と Belenky を引用し、4タイプの認識の仕方を説明している (表1)。

表1 認識の4モード

1. 知識は権威者から受け取るもの。真実は白か黒か
2. 真実は主観的なもので、個人的、直観的なもの
3. 知識は合理的省察、エビデンスから得られるもの 真実は妥当性を確かめるための対象
4. 知識は構成されるもので変化するもの 真実は状況や知る人の視点にとっての対象

次に知り方について述べている。学問には、それぞれの分野独特の知り方もあるが、共通する知り方もある。

表2 量的研究と質的研究

	量的	質的
研究デザイン	記述 (相関, 調査) 実験	エスノグラフィー 事例研究 現象学 ゲラウンデッドセラー
データ収集法	観察 インタビュー 質問紙 測定 文書記録収集 視聴覚材料	観察 インタビュー 文書記録収集 視聴覚材料

さらに、知り方は現象を理解するにつれて変化する。一般的には、自然主義 (量的研究) と実証主義 (質的研究) の立場が有名である (表2)。最近はこの2種類を同時に使うことのメリットが指摘されているという。もちろん作業の研究でも、両方の知り方が必要である。

最後に作業の研究を行う際の研究疑問を、5W1Hで考えることを提案している (表3)。

表3 作業の研究疑問

	研究疑問の例
誰が Who	全ての人が作業をするか 年齢, ジェンダー, 人種, 地域, 民族, 能力, 健康, 社会経済的地位との関連はあるか
何を What	どんな作業パターンか どんな作業プロフィールか どの作業を選ぶか
いつ When	一日, 一週間, 一年, 一生涯のいつか 時期による作業の違いは何か 文化的, 経済的, 政治的, 社会的文脈が, いつ作業をするかを定めるか
どこで Where	特定状況下での特定の作業があるか どこでも行われる作業はあるか ある環境が特定の作業を導くか
どの ように How	どのように作業が創造, 学習されるか 人と作業はどんなプロセスで結びつくか 作業との結び付きは, どのようにサポートされるか, どのように妨げられるか
なぜ Why	全ての作業が意味をもつのか ある作業をし, 別の作業をしないのはなぜか

著者は、作業の研究の用語として occupationology (作業学) を好んでいるが、本研究会は作業科学 (occupational science) を採用している。どちらが適切かについて考える際にも、認識の4モードが役立つだろう。私たちは皆作業をすることができるが、作業を十分に知ってはいない。だから、作業を研究しようということになっているが、どんな方法で研究したらよいかわからない。作業って何だろう。どうしたら作業が何かわかるのだろう。まさに作業のミステリーである。私たちは今、作業を研究しようと、作業のミステリー解明の扉の前に立ったところなのだろう。(吉川ひろみ, 県立広島大学)